

# 第八回「群黎賞」決定

## 第八回「群黎賞」受賞作

吉見恵美子「種を集めて」

正賞⇨賞状および佐佐木幸綱歌集『群黎』

副賞⇨選者三名寄書き色紙および万年筆

## 選者賞⇨各選者より記念品

### 選考委員（選者）

佐佐木頼綱、佐佐木定綱、久永草太（前年度心の花賞受賞者）

### 選考過程

- ① 応募総数 三十九編（内、メール二十六編、郵送十三編）
- ② 各選者が一点・二点・三点の歌をそれぞれ五作品まで選び、七月十七日に一次選考会を開催。三点以上を得た十七編を予選通過作（下段）とした。
- ③ 通過作の中から各選者が改めて各五編に投票。八月七日に最終選考会を開催し、得票のあった十一作品（○印）から二点以上を得た作品（◎印）を中心に合議、「群黎賞」および三編の「選者賞」を選んだ。尚、いずれの選考会もWeb会議システム(Discord)上で行った。

## 予選通過作十七編（五十音順）

- 雨雨雨汰「夜勤専従」
- 伊藤真紀「交差点」
- ◎梶山都「空すこしづつ」
- 口笛浦「記録」
- 国兼麻貴「手の平に」
- 黒乃響子「冷たいスウプ」
- 小宮教子「大潮の夜」
- 佐藤直大「世紀末入社組」
- 重黒木俊陽「にんげんの匂い」
- 諏訪花「窓際の母」
- 藤しおり「宇宙犬」
- 秦千依「空に」
- 葉月ままこ「またあした」
- ◎深尾早央里「ふはふは離れる」
- 福田樹生里「さくらいろいろのみみ」
- 守乃みさと「暗喩渦巻く」
- ◎吉見恵美子「種を集めて」

種を集めて●吉見恵美子

ドアノブとぶつかつたのは四度目で怒る息子の頬骨冷やす

母よりもダンゴムシとかカナヘビを愛すお前を遠くから見る

手、蚊、桃、ばかり出てきて進まないしりとりをする雨の日曜

子の声を受けてはためく鯉のぼり緋鯉のしつぽ少しほつれて

姉ちゃんのエルフの音読聞きながらシクシクシクシク弟は泣く

拗音の「や」を書く小さき手が握るボールペンの微かな震え

ぼろぼろと取りこぼしてる成長の種を集めて歌うララバイ

マンモスは汚い茶色いゾウと言う息子の瞳輝いている

はんぺんが鍋蓋ぐいと押し上げる ねえねも流石に黙っていない

リカちゃんにゴリラ踊りをさせたのが原因らしい姉弟喧嘩

「迷子なの？」と吾子に問われて見上げれば有明の月しよんぼり浮かぶ

ごほうびが源氏パイなら半分はねえねに残しておく弟

砂粒を落とし続ける吾子の靴ひっくり返せない砂時計

吾子からの手紙「ま」の字の横線の多さは虫に見えるが愛だ

遠景に子が船と呼ぶものがあり我には見えず見えなくていい

受賞の言葉——吉見恵美子

短歌を始めて三年になります。定型のリズムの上で言葉にすると、日常のちよつとしたことでも鮮やかに、特別な思い出として切り取れるということに驚いている日々です。この連作は、日常の中でも特に取りこぼしやすい第二子の成長を軸に編みました。作品を作る過程は、子どもの成長、自分の感情や子育てのことをじっくり味わえる豊かな時間でした。そうしてできた作品をこのような素敵な賞に選んでいただき、選者の先生方、ありがとうございました。また、不勉強でトンチンカンなことを言っているであろう私を、いつも優しく受け入れ導いてくださる心の花の皆様、Zoom歌会で出会った方々に感謝申し上げます。



## 空すこしづつ ● 梶山都

介護割引航空券 先月にはじめて使ひき明朝も飛ぶ

「姑」<sup>はは</sup>「さびしい」 検索をせし夜からか居間の天井いくらか高し  
野線のあるノートへと書くやうに声とのへて話す夫は

液晶のむかう夫のむかうより伸びくる姑のさびしさはゆび

夕さらにノートPC閉ぢしとき蛍光灯のかすかに鳴りき

マグカップに白湯をそそげば卓ゆれて「無事着陸」と液晶に浮く

窓へだて風のひびけり 枝えだを何処へもゆかせぬ櫛みえをり

両膝でおさへてスーツケース閉づ 何か足らざる予感も入りぬ

この身ひとつここに留むる日<sup>にち</sup>日をこぼれつづくるさざんくわの白

薄荷飴をふくみつつ伏す寝台に<sup>お</sup>庄さるべしひとつしむらとして

くだり坂のはじまるところビルの間に点る破線のタワーをさがす

室内灯のスイッチ四つすべて切り窓辺に羽田の街の夜を撮る

紙コップの珈琲をひとくちふくむ空すこしづつあかるみてゆく

吊られつつ朝<sup>あした</sup>の窓をみがきぬる背<sup>せな</sup>みえてもう覚めぬむ姑も

クロワッサン生ハムサンドひとつ買ふちいさく切りて食むひとのため

世紀末入社組 ● 佐藤直大

皮脂という自前の墨で生き様を通勤列車の窓に擦り取る

朝一番先輩方の机拭く鑑識官のごとく緻密に

デスクには固定電話と灰皿に黒いネクタイ 凶器がならぶ

歓迎会またの名前を品評会座持ちの良さを同期と競う

トークでは分が悪いゆえ倍速のししおどしとなり可愛がられる

ネクタイを頭に巻いて仲間入り 24時間戦う部族に

オアシスはビルの谷間に現れしビールケースが椅子の居酒屋

それぞれの戦果を持ち寄り同窓の友らと乾杯ネクタイ緩めて

今というブラック企業がかわいらしく思える友の語りし職場

未消化の会話を最期に消えし親友「また今度」の嘘を残して

音信を絶った者を探すとき己の無力にまづは向き合う

ぼくらってボーリング場のピンみたい倒され起こされ無限のループ

氷河期を生き抜くものの手当なくネクタイ外し傷口縛る

来し方を「失われた」と括られてせめての抵抗「失わせた」でしょ

いつの日か職業欄に旅人と記すを夢見る傷痍会社員

ふはふは離れる ● 深尾早央里

ついたちに夫の並べる菜の花の Pasta が照らす食卓を見る  
 この人は嘘は吐かないだらうからドレッシングで水菜を隠す  
 何にでも美味しいと言ふわれと行く幸楽苑の若布ラーメン  
 蠟梅の香りに向かつて歩かうと誘へばふはふは離れる夫よ  
 先月分の記念日キスをする時のプラスチックのやうな唇  
 結婚し九年目だと伝えれば「ウン」と言ふ夫、壁紙の白  
 仕方なく熱い麦茶を淹れてやるパックを蒸らすと夜がはじまる  
 寝返つてもしも死んだら悲しいか聞いても夫は液晶を見る  
 ダージンあなたの声はダージン ミルクなくてもどこか甘くて  
 マリツジリングは薄明かりする玄関で狛犬・蛙・シーサーと並ぶ  
 暮の春 産んでない児にふふませる乳房の位置を検索を知る  
 この街につばくるの飛ぶ日曜に揃ひでおろすガーゼのパジャマ  
 誕生日に行く居酒屋で好物と教へてもらふ鯛の天ぷら  
 その声はしづかに光ふりこぼす「治るのをずっと待つてゐるから」  
 月末のハゲの日のきて店先のふぞろひ苳を一パック買ふ

# 選考を終えて

佐佐木頼綱×佐佐木定綱×久永草太

## 家族の関係性、距離感の美しさ ●佐佐木頼綱

8月7日、久永さん、定綱と第8回群黎賞最終選考会を行い、吉見恵美子「種を集めて」を受賞作品に選んだ。

・ドアノブとぶつかったのは四度目で怒る息子の頬骨冷やす 吉見恵美子

・姉ちゃんのエルフの音読聞きながらシクシクシクシク弟は泣く

母親と息子、姉弟といった家族の関係を繊細に描写した連作。特に、「怒る息子の頬骨冷やす」や「姉ちゃんのエルフの音読聞きながら」といった、一瞬を丁寧に捉えた表現、家族の愛情や葛藤、温かさに胸打たれる。家族や親子関係を詠むことは現代短歌における重要なテーマの一つとされているが、改めてこうした身近で普遍的な感情を詠む魅力を感じた。

・「迷子なの？」と吾子に問われて見上げれば有明の月しよんぼり浮かぶ

「迷子なの？」と問われた母親が空に浮かぶ月を見上げる場面。描こうとしたのは母としての葛藤や孤独感だろう。私性を深めつつ、それを普遍的なテーマと結びつけ

ているのも本作の大きな魅力といえるだろう。子どもたちとの触れ合いを描きつつ、私的なエピソードにとどまっていけない連作を群黎賞にふさわしいとして推した。

最終選考では各選考者が三作を推薦したが、私が推薦した他の二作は梶山都「空すこしづつ」と深尾早央里「ふはふは離れる」。

梶山都「空すこしづつ」は日常の微細な感情や出来事を丹念に描いた連作。「介護割引航空券」「駅のスイッチ式ガード下」といった具体的で現代的なディテールが詩情を深めている。

・介護割引航空券 先月にはじめて使ひき明朝も飛ぶ 梶山都

・マグカップに白湯をそそげば卓ゆれて「無事着陸」と液晶に浮く

・「姑」「さびしい」検索をせし夜からか居間の天井いくらか高し

遠距離、天井の高さ、今の生活と過去と現在、未来への予感が交錯する様な連作。作者は距離に美を描こうとしているのだと私は読んだ。距離が豊かな物語性を持ち、読者の想像を刺激する。

深尾早央里「ふはふは離れる」は身近な

人間関係の複雑さ、夫婦といった関係をテーマにした魅力に惹かれた。液晶のむかう夫、月末のハグの日。結婚して十年経った家族の距離感や孤独感を丁寧に描く。日常の中の微妙な感情が鮮明に表現された連作だった。

行数が無くなってしまった。他には黒ぶちのメガネの女医にやわらかく告げられていた「皮膚癌です」と 諏訪 花

冷徹な現実と、それを受け入れざるを得ない瞬間。日常の中の非日常を描いていて胸打たれた。

・渋谷駅前のティッシュよすこしづつ踏まれ踏まれて白鳥になれ 重黒木俊陽

現代の景と幻想の交錯させる連作「冷たいスウプ」。物語性、象徴性に惹かれた。

・シャーレーに小さくペンで円を書き異物をさがす母の仕事は 黒乃 響子

細やかな観察と描写によって、日常の中にある詩的な瞬間を捉えた一首。

この他、葉月ままこ「またあした」、藤しおり「宇宙犬」なども推した。

多くの作品に、刺激を受けながら読ませていただいた。

## 詩情への昇華 ● 佐佐木定綱

第八回群黎賞は吉見恵美子「種を集めて」に決まった。

「種を集めて」は子育ての連作である。姉と弟を育てる母親の視点で歌われ、まだ幼い弟の歌が主軸となっている。「手、蚊、桃」など簡単な言葉を繰り返すためにしりとりが進まなかったり、マンモスのことを「汚い茶色いゾウ」と使える範囲の言葉を駆使して表現したりと、言葉を使えるようになってきた幼い息子の行動を鋭く捉えている。

争点となったのは「これは子どももの手柄なのではないか」という点である。思いも寄らない子どももの発言や行動は常識に囚われた大人に深い感慨をもたらず、それをうまくすくい取っているだけなのではないか。私は作者が子どもものの行為を引き取り、自らの歌として詩情に昇華させている点を評価した。例えば、子の靴から落ちる砂から砂時計を連想し、「ひっくり返せない砂時計」と愛おしくも過ぎ去ってしまう幼い子との時間の儚さの表現などである。さらに最後三首の秀歌は作者の力量を表すのに

十分だろう。

選者賞には佐藤直大「世紀末入社組」を選んだ。タイトル通り、氷河期に社会人となった一人の社会詠である。特筆すべきは連作に一貫している比喩とディテール、そしてユーモアとベロソスだ。皮脂を「自前の墨」として窓に付けていたり、上司への相槌を「倍速のししおどし」と言ったり。極端な自身の戯画化をすることで相対的に社会批評性を連作に付与している。なによりも読み手を楽しませてやろうという気概と楽しんで歌を詠んでそうと感ぜさせてくれたことを高く評価したい。

以下、順不同で気になった作品を。

黒乃響子「冷たいスウプ」、独特の幻想的な雰囲気良かった。抽象的な歌が多く、核となる母や町の輪郭が少しぼやけてしまった気がする。「ネギの匂いの食品工場」など極めて良い具体を活かしたかったか。梶山都「空すこしづつ」、「介護割引航空券」を使い、離れて暮らす姑の介護をしている。姑という微妙な関係性の表現がとても巧みだった。秦千依「空に」、「夏虫色」背縫い」などの言葉が美しく、連作に色彩と世界観を与えている。一枚のイラスト

卜のような切り取りが非常にうまいと感じた。ぜひこの調子で行ってほしい。伊藤真紀「交差点」、義父という共に生活する者が増えたことで生じる変化を丁寧に歌っている。何より連作が優しさに満ちていることが素晴らしい。面白そうなキャラの孫の歌が特に良い。深尾早央里「ふはふは離れる」、九年目の夫婦の距離感を絶妙に歌っている。愛情はあるが、不満もある、という感じだろうか。表題歌は秀歌。藤しおり「宇宙犬」、巨大なものを詠み込もうとする意志が感じられて好感が持てた。「マツコリの瓶」の歌のような詳細な具体の歌がもう少しあると巨大な視点との対比が更に決まると思う。雨雨雨汰「夜勤専従」、障がい者施設での夜勤がテーマ。勢いと闇も光も歌いこむ姿勢が魅力である。「片親パン」などミーム的な言葉を使うのも合っている。福田樹生里作品、凄まじい愛憎。表現にやりすぎなどところもあるが、凝った比喩は好きだった。

## 十五首で描ける上限 ● 久永草太

かつて群黎賞に三度挑戦し、ついに受賞し損なった身ではあるが、この賞に育ててもらった一人として、今回の選考に携われたことをうれしく思う。

第八回群黎賞は吉見恵美子「種を集めて」に決定した。最終選考では得票が広く分散したが、本作については審査員三名全員が票を投じている。一方で「弟」に「生き物」とルビを振った一首の可否は議論になつた。ルビや詞書は、一行詩で場外戦をやるようなものであるから、使用する際には細心の注意を払う必要がある。

・ドアノブとぶつかったのは四度目で怒る息子の頬骨冷やす

・マンモスは汚い茶色いゾウと言う息子の瞳輝いている

・遠景に子が船と呼ぶものがあり我には見えず見えなくていい

エネルギッシュな息子が翻弄される、というよりもちょっと諦念がある母の姿にくすりと笑わされる一連だ。『オレがマリオ』のあとがきで俵万智が「子どもの歌は、刺身で出せる」と書いているように、ただ描

写するだけでも面白くなってしまふ題材であるため、選考する視線も割り増しに厳しくなるところだが、特に「遠景に」の歌を含む最後の三首によつて、連作全体の詩情が一段引つ張り上げられたと思う。

同じく最終選考で三票獲得し、吉見作と最後まで競つたのが、梶山都「空すこしづつ」だった。姑との距離感（劇的でない、きわめてありふれた距離感）をうまく言語化しており、

・薄荷飴をふくみつ伏す寝台に圧さるべしひとつしむらとして

右の歌や「スイッチ四つ」のようなさりげない視点も行き届いた旅行詠である。

久永賞は深尾早央里「ふはふは離れる」に差し上げた。「菜の花パスタ」を並べる夫、「嘘は吐かない」夫、「鯛の天ぷら」が好物の夫。十五首で描ける人物像×人数の

積には上限がある。深尾作はその点が熟慮されていて、登場人数を絞り込むことで、夫とわれの解像度を引き上げることに成功している。

・先月分の記念日キスをする時のプラスチックのやうな唇

・ダーズリンあなたの声はダーズリン

ミルクなくてもどこか甘くて

・暮の春 産んでない児にふませる乳房の位置を検案に知る

甘やかな二人の関係に時折差し込まれる、ひんやりとした予感。「治るのをずっと待つてある」という、愛の形をした呪縛。一読目と二読目で印象の変わる「ふはふは離れる」夫の表題歌。構成が実に巧みな連作だった。

以下、印象に残った作品を、紙幅の許す限り。

・はじまりを海と書きたる家系図がつなげるわれとこのたんぽぽを

(重黒木俊陽「にんげんの匂い」) 文体が筋骨隆々、秀歌の多い連作だった。

・膨張をつづける宇宙の大潮の夜を珊瑚の卵ただよ

(小宮教子「大潮の夜」) 具体的な魚の名が、連作の彩りを増している賑やか。

・ダンゴ虫を転がし遊びてバス迷す 大丈夫だよバスはまた来る

(福田樹生里「さくらいろのみみ」)

安心感があるが退屈もさせない韻律のよさがピカイチ。